

こじらせ人見知りには距離を置いたら猫かぶりガチ執着ヤンデレ後輩に可愛がられる

私に話しかけないでくれ。

こわい。

これは仕事終わりの飲み会で女子同僚達に話されてる影山蓮（かげやまれん）の本音だ。

影山蓮はごく普通の会社員だけど、最近入ってきた後輩は特別な人物だ。

大手会社の社長の息子さんー木村陽翔（きむらはると）

御曹司で人当たりのいいイケメン。

そんな人が社長の要求で一番下っ端からのし上がらないといけ
ない。

たまたま、会社でほとんど存在感がない影山蓮の元に指導を受け
ている。

だから、人見知りな影山蓮は木村陽翔を狙ってる女子達に囲まれ
てる。

「ねえ、陽翔さんは普段何をしてる?!」

「あ、あの…」

「どんな女の子が好き?!」

「その…」

「連絡先は?!」

「ううん…」

影山蓮は怒涛な質問に押されてあせあせしてる間に、居酒屋の個室のドアが開けられた。

「ごめん、男子会で遅れちゃいました。レディ達もう飲んでます?」木村陽翔はちよつと申し訳なきさそうに笑いながら、個室に入ってきた。

他の男子同僚達も彼の後ろについてくる。

彼が入ってきた瞬間、影山蓮に群がってる女子達は獲物を見たハイエナのように、男の人のそばに寄っていく。

解放された影山蓮はホツとして、目の前の梅酒をちよびちよび飲みながら、エリート男子達の中でも際立つ茶色髪の青年をチラ見して

る。

こんな飲み会はめっちゃくっちゃ嫌だけど、木村さんが行くって言ったから来てしまった。

少しだけでもいい、彼のそばにいたい。

影山蓮は伏し目で自分の恋心を隠して、個室の片隅で既に盛り上がった中心の会話を聞いている。

「木村くん今彼女とかいる？」

ないないないない。

女子達全員心の中でそう祈ってる。

「あいにくだ、まだ見つかってないよ。先輩はいいっすよね。か

わいい彼女さんとラブラブだね。」木村陽翔は大げさにため息をして、質問した先輩の失笑を買った。

彼の答えを聞いた影山蓮はちよつと口角を上げて、嬉しくて目を細めたが。

次の瞬間は心臓が痛くて、全身が急に裸のまま真冬の井戸水に投げ出されて凍え死にそうと錯覚してる。

「でも気になる人がいるんだ。誰かは言えないが、とてもやさしくてかわいい人だ。」

木村陽翔は恥ずかしく笑って、グラスに口をついた。

口が隠されてる間に、人を溺れられそうな目はこっそりとすみっ

ここで俯いてる女の子を捉えている。

終わった。

私の恋。

女子達の嘆き声と男子達の哄笑は全然影山蓮の耳に入ってこない。
い。

絶望と失恋の衝撃に耳鳴りしてるかも、今の影山蓮は騒音しか聞こえない。

木村さんの好きな人はきっと美人でしょう。

私みたいな地味な陰キャと大違いだ。

ヤバい、泣きそうだ。

でも泣いたら恥ずかしい。どうしよう？

「よし、今日はいっぱいのおむんだ！」影山蓮は小さい声で自分を励まし、ガラスの中に残ってる酒をグイッと一気に飲み、おかわりを頼んだ。

一杯。

また一杯。

飲み会もそろそろ終わり、酔っ払って変なことを言い始めた人、

笑い上戸、泣き上戸が続出してゐる。

アルコールで意識が飛びそうでも、ちゃんとお金を払わないということだけが覚えている。

影山蓮は自分の料金をテーブルに置いたら、フラフラと静かに百鬼夜行の個室を出た。

さっきからずっと影山蓮を見つめてゐる木村陽翔も彼女の後を追ひ、その場を去つた。

「影山先輩！家まで送つてあげます！」タクシーを呼ぶかどうかを迷つてゐる影山蓮の背中を見つけた木村陽翔は、さりげなく影山蓮のカバンを持つ。

影山蓮は話しかけてくる人は誰かが分かつてないようだ。木村陽翔の顔をまじまじと見つめてゐる。

誰だろう？つと朦朧してる目を細めて、鈍い頭を動かしてる。

木村陽翔はただニコニコして、夜風に吹かれて舞い上がる髪の毛を影山蓮の耳にかけてあげる。

知ってか知らずか、微熱な指先がまるやかな耳たぶを摩ってる。

半分後、ようやく木村陽翔だと分かったそうだ。

「木村しゃん？大丈夫でしゅ。ひとりでかえれましゅ。」きこつき彼の好きな人がいる発言を思い出した影山蓮はまだ心が痛い。

頭を左右に振って、アルコールのせいで滑舌悪いもの的小伙伴と断った。

優しくされると勘違いしちゃう。

木村さんのことを手放せない。

だから断らないと。

乾燥の夜風かもしくは飲みすぎのせいかも、意外そうな顔をしてる青年を見上げてる影山蓮の瞳はうるおくて、次の瞬間涙が出てもおかしくない。

居酒屋の光が漏れて、影山蓮の顔を照らしてる。木村陽翔は彼女を見据える。

白い陶器肌は光に照らされて発光してるらしい、緊張に小さい扇みたいなまつげが震えている。

その目は涙でぼやけてるが、キレイなままだ。

蓮先輩の曇りのない目が好き。

今もそうだ。複雑な気持ちがある目にも含んでも、一目で目の奥が見れる。

俺に恋してる。

かわいくて誰にも見せたくない♥

「俺一人では帰れません。影山先輩送ってくださいよ。」

「けど…」

先日、影山蓮は意外なことを知ってしまった。

まさか木村さんは隣に住んでるとは思わなかった。

一緒に帰ったほうがいいかも…。

「後輩の面倒を見るのは先輩の責任でしょう？」影山蓮の動揺に気づいた木村陽翔はさらに油をかける。

「しょうがにやいな：今回じゃけでちよ」どうしても強気に出ない影山蓮は先に折れてしまった。

「うちの運転手さんはそこで待ってるから、行きましよう」影山蓮に反応する時間をくれないみたい、木村陽翔はすかさず女子の柔らかい手を取って、駐車場に行った。

好きな人と手を繋いでることを分かった時、影山蓮の顔が真っ赤になり、振り解きたいが振りほどけない。

別に強く握られてるわけじゃなくて、惜しいと思ってしまった。

最初と最後に木村さんと手を繋いだチャンスかも。

どうせ車に乗ったら離すなら、最後だけ欲張ってもバチに当たたら

ないでしょう。

飲酒で影山蓮の体温がやや高くなり、まるで上質な軟玉を握っている感触に病みつき。

わざと女子が気づいてない時、玉手を撫でさすっている。

蓮先輩の手も柔らかい♥ずっと繋ぎたい♥

車に乗っても木村陽翔はその手を離していない。

眠たい影山蓮は車の揺れにつれてうとうととして、そのことに気づきもしなかった。

「眠いなら眠ってもいいですよ。着いたら起こしてあげます。」

影山蓮の頭が三回目前の席にぶつかりそうな時、木村陽翔は我慢でき

ず彼女をこっちの方向に引つ張った。

「うん…」影山蓮はつぶやきながら寝てしまった。

女性の柔らかい体が木村陽翔の肩にもたれかかって、女子のいい香りが漂ってきた。

今日はアルコールが混じったメス香りか…♥

めっちゃキマってる♥

木村陽翔は深呼吸してごっくりと唾を飲んで、こっそりと足を組んで反応してしまった所を隠してる。

「俺でも男だから、もうちょい警戒してよ…」そう言いつつも、不満な顔じゃなくて、魚を盗み食いした泥棒猫みたいに満足気に微笑

んでる。

まもなく、影山蓮が住んでるマンションに着いた。
木村陽翔は惜しげにため息して、優しい声で影山蓮を呼び起す。

「先輩、もう着きましたよ。起きてください」

「うう…あとごふん…」影山蓮は目を閉じたままつぶやいてるついでに、石鹸のいい香りをしてる青年に顔をすりすりしてる。

無意識のかわいい仕草のせいで木村陽翔は悶え声を出て、股間の布が突き破られそうだ。

優しい声が掠れてきて、目の奥が底なし沼になった。

「先輩、カギはカバンに仕舞ってますか？」

「うん…」

「じゃ部屋まで送りますね」木村陽翔はカバンの中にカギを見つ

けた後、先に車を降りて、寝ている影山蓮を車の中から抱き下ろした。

急に動かれてうっとしいらしい。影山蓮は顔をしかめて、うんうんと小さい唸り声を出してる。

「よしよし、すぐ着くからもうちょっと我慢してね」木村陽翔は低い声で影山蓮をあやしつつ速く歩いている。

カチャツ

バタン

影山蓮をベットの上に降ろして、彼女のジャケットと靴を脱いでそれぞれを仕舞うべき場所にしまってから、トイレに行った。

洗面所で竹のような骨ばった指を一本一本丁寧に洗ってから、また寢室に戻った。

ベットの寝心地の良さに溺れてる影山蓮は寝返りを打って、スカートが腰まで巻き上げられた。

本人はそのことをまったく気にしないで、すやすや寝っている。木村陽翔はベットに腰をかけて、影山蓮の寝顔を見つめる。

「先輩？」

「うう…」

「ふふ、かわいい。このまま食べちゃいたいね。」長い指でそつと影山蓮のパンツを降ろして、蒸れてるまんこをまじまじと眺めている。

「先輩のおまんこはエロいな。しかもちよつと濡れてる」

木村陽翔に見られてるまんこが恥ずかしがってるみたいになヒクヒクしてる。それを見た青年の息が荒くなり、瞳孔が開いた。

青年はポケットからスマホを取り出して、人差し指と中指でおまんこを拵げてる写真を撮ってから、秘密カメラフォルダに保存しとした。

「今日のオカズありがとうね。しかし、生おまんこは監視カメラで見たより綺麗でかわいいな。一発ぐらいはバレないだろう」

カチャツカチャツ

ボロンツとボクサーパンツに縛られてる凶悪な勃起チンポがようやく自分の主人に解放された。

影山蓮のパンツのおまんこと接しているところで亀頭を包んで自
流してる。

精悍な腰を前に突き出すたびに、ちゅちゅとおまんことキスみた
いに軽く当たってる。

「はあっ、先輩と間接セックスしてる。気持ち良くて腰が止まら
ん♥」

鋭い目がとろけてきて、青年はわざと熟睡してる影山蓮の耳元で
呻き声を出しながら小さい耳たぶを舐めてる。

吐息の熱に焼かれて影山蓮の耳はだんだん赤くなり、口から小さ
い喘ぎ声が出てきた。

「あっ♥ごうっ…♥」

「そんなかわいい声を出しちゃって、どんな夢を見てるんだ？俺

に抱かれてるとかエツチな夢？」

子猫のような喘ぎ声は木村陽翔の神経に刺激を与えた。

木村陽翔の吐息と悶え声が増えて、手と腰を加速して、ビクビク跳ねて昂ってる紫赤色のチンポを慰めてる。

「かわいいッ♥ううッ：すつごくかわいい♥もうちよっと喘いで？先輩の声が好きだ」

入口が亀頭に突かれるおまんこはどぶどぶと愛液をこぼして、拳ほどでかい亀頭を包んでるパンツを濡らしてる。

「はあッエロい♥先輩めっちゃ感じてくれたやん♥嬉しい♥

このまま奥に突っ込んだら絶対気持ちいい、俺は先輩のおまんこなら何発でもイケそうだ。

犯したい♥

中出ししたい♥

孕ませたい♥」

木村陽翔はパンパンと腰を振って、影山蓮の耳元で吐息多めな震え声で愛を囁いてる。

しかし、返事は甘い喘ぎ声だけだ。

「あうッ♥ぐッ♥」

「先輩、俺はすぐ健康だ。先輩が腹筋好きだから、毎日筋トレと運動もしてるし。精液の量も他の男より倍多い。」

だから、危険日まんこじゃなくても子宮にびゆるびゆるされたら絶対孕むよ♥先輩は妊娠したらパニックでボロ泣きそうだ。だって、

子供のパパは誰かすら知らないもん。人見知りだから、頼れる人もほとんどいない。かわいい先輩を助けるのは俺しかいない。

「ああッ♥想像するだけでそわそわしてきた♥」

ちゅちゅとパンツ越しでも入口がビクついて、かたい亀頭に吸い付いてる。

パンツはすでに愛液と先走りの種汁でぐちゃぐちゃになってしま
い、ボロ雑巾のようだ。

「今日来た女の中で先輩以外は全員俺の子供を欲しがってるらしい。孕んだら次期の社長夫人だもんね。」

先輩だけは違うんだ。社長の息子じゃなくて、後輩の俺を好いてくれてる♥ふふっ変わった人だ。でも大好き♥」

ちゅちゅっ ♡

影山蓮を起こさないように、唇に軽いキスを繰り返してる。

細い首、赤い耳、頬、鎖骨、柔らかい胸にも満遍なくキスされてる。首側に二つぐらいのキスマークをつけた。

「ぐあッ ♡ ♡」

「これぐらいは鈍感な先輩が見ても蚊に刺されたと思うだろうね ♡ ぐはッ イキそうッ」

限界がそろそろ来たのを感じて、開いてる鈴口をパンツ越しにピツタリとまんこの入り口と重なったまま、強くシゴいてる。

「ああッ… ♡ イクッ… ♡ 出すぞッ ♡ ガチ恋まんこに俺の子種を全部出してやるッ！ ♡」

木村陽翔の体が強ばって、ビュルビュルルと勢い良く射精して
る。

パンツ越しでも、精液はパンツを通り抜けて膣の奥へ発射されて
る。閉鎖されてる子宮口に当たって止まってしまった。

精液の熱さに刺激されて、膣の奥がキュンキュンして、影山蓮も
イッてしまった。

「ぐうう♥♥ぐあ♥」

「はあー♥先輩もイッちやってるかわいいッ…♥ぐッ…中出し気
持ちいいよねッ♥」男は影山蓮の体を抱きしめて、最愛の女性を種付
けてる快感を噛み締めてる。

濃厚な白濁は膣の中に充満して、粘い愛液と混合して外に漏らそ

うな時、入口を塞がってる亀頭に阻止された。

溜まつてる液体のせいで影山蓮のお腹がちよつとだけ膨らんでる。

「かわいい♥一発でお腹が大きくなちゃったじゃん♥」木村陽翔の手が軽く柔らかいお腹を押した。

「ぐおおッ♥♥♥」衝撃で影山蓮の腰がヘコヘコしてエロいダンスを踊ってるようだ。

さつき射精したばかりのチンポは煽られて、すぐ元気を取り戻した。

「はあ、エッロ♥あんまり俺を煽るなよ。我慢できなくなちゃっ

て、このまま先輩を拉致して監禁しちゃうかも。」木村陽翔は満足に微笑んで、ビクビクしてるお尻を軽く叩いた。

ベットの隣に置いたティッシュを数枚取って、結合部の下に敷いてからゆっくりとカリのたかい肉棒を抜いだ。

ドロドロと溜まった濁液は下に垂れていく。ティッシュの上ですぐに水溜まりができてしまった。

「先輩のため出したザー汁だから、もったいなくエロまんこで全部食べて」中指で水溜まりを掬って、膣の中を隅々まで塗っていく。指に入れられても、疲れた影山蓮は唸り声で反応するだけだ。

「ぐう♥ぐう」水溜まりがどんどん減ってる途中、おまんこまた何回も痙攣してイッてしまった。

「ドスケベまんこが虐められて嬉しくなったね…ふつつマゾメスの素質があるらしい。」影山蓮がイッてる最中にかたい肉棒でペチペチと愛液を吐くおまんこを叩いてる。

水溜まりを全部掬い終わったあと、つぶ濡れのパンツを影山蓮に履かせた。肉棒についてる愛液を柔らかい太ももの内側に擦り付けた。

勃起してるチンポを強引にボクサーパンツにしまつて、身だしなみを整ってから、現場を整理してる。

影山蓮が寝言を言うたびに、ピンク色の唇に軽くキスした。

「おやすみ、先輩♥また明日ね♥」

マンションから出た木村陽翔の表情はまるで満腹した猛獣みたい

だ。

私は最低なクズかも：

木村さんが好きな人がいるって分かってるのに、彼にめっちゃく
つちやになるまで抱かれてた夢を見ちゃった……

「はぁーパンツもびしょ濡れで使えない：最悪な朝だ……」影山
蓮は両手で顔を覆い、瀕死の鳥のような呻き声を出しながらベットで
ゴロゴロして現実逃避してる。「どの面下げて木村さんと会えばいい
の？」

「いいや？」急にベットから飛び上がり、目をまっぴらに開いた

影山蓮は脳を高速に回転させる。「別に会う必要もなくねえ？」

元々木村さんは三ヶ月の試用期間だけで私の元で会社のことを学んでた。その時間はとつくに終わった。

今は何故か木村さんは転属を命じられてないし、彼自身からにも「先輩の元でもっと学びたい」とか言われた。

けど三ヶ月の壁を乗り越えた時、木村さんはすでに一人前になったはずだ。私から学べることももうひとつもない。

私なんかより他の先輩達に彼をサポートさせた方がいいじゃない？ そのほうも彼のキャリアアップにとつて有益だ。

木村さんはやっぱり私と会わないほうがいいんだ…。

「けど、何故か心がこんなに苦しいんだ…」影山蓮は膝を抱え込んで、涙ポロポロ落ちていく。

「ううん、木村さんからいっぱいもらっちゃったから、これ以上は横着だ」手の甲で涙を拭いて、枕の隣に置いてあるかわいいチンチラのぬいぐるみを抱きしめてる。

木村の試用期間が終わった時お祝いしてあげた。その後、この子を返礼してくれた。

ちようどかわいいもふもふ大好きだから、ものすごくはしゃいだ。

「木村さんが送ってくれたチンチラちゃんがあるだけで満足しろよ、影山蓮。」落ち込んでる低い声が部屋の中に響いてる。自分が彼を諦めるように願っている。